



緊急 国際情勢解説

—アフター・コロナの国際地域②—

地域に行けないとき地域研究(者)はどうなるのか

末近 浩太

(立命館大学国際地域研究所副所長／中東・イスラーム研究センター長／国際関係学部・教授)

立命館大学の国際地域研究所は、英語の名称だと Institute of International Relations and Area Studies、すなわち「国際関係学と地域研究の研究所」であり、「国際地域研究」とは国際関係学(IR)と地域研究の協働を意味している(と個人的には理解している)。現下のコロナ禍は、あらゆる学問分野の研究活動に多大な影響を与えているが、ここ国地研においては、この二本柱の1つの地域研究が困難に直面している。それは、端的に言えば、グローバルな規模で人の移動が制限されるなかで、研究対象の地域に行けないからである。

この問題は、特に地域研究者を志している学生・院生、若手にとって深刻である。地域研究者の強みは、現地の言語や人的ネットワークを駆使してトリビアルな情報やデータを収集するところにある。現地に行かずして「地域のスペシャリスト」であるはずの地域研究者になれるのか——不安や戸惑いの声があちらこちらから聞こえてきている。

1. 地域だけでない地域研究

大前提として、現地に行けないときにやるべきこと、やれることはある。逆に言えば、現地に行けば自動的に地域研究になるわけではない。そもそも、「現地主義」だけでは、ジャーナリズムと地域研究の区別がなくなるし、むしろ、年単位で現地での取材を続けているジャーナリズムに軍配が上がることになる。地域研究が学問にたり得るためには、その地域を理解するための枠組みや道具がきちんと用いられているかどうかが重要となる。

この場合の枠組みとは、政治学、経済学、社会学、人類学といった学問のディシプリンである。その地域の理解のためには、これらの有用性と限界性の両方を踏まえておく必要がある。これまでの方法や手法によって何がどこまでわかるのか、あるいは、従来の学問では地域の何が見落とされる恐れがあるのか、その見直し立てるためにはディシプリンの勉強が不可欠である。

他方、道具については、筆頭に挙げられるのはやはり現地の言語であろう。現地の言語が

できるのとできないのとでは、収集できる情報やデータの量も質も大きく違ってくる。それだけではない。現地の言語を勉強するということは、その言語を使う人びとの世界認識に迫る営みでもある。あらかじめ日本語や英語に翻訳されたものは、もともとの言葉に込められた意味や用法とズレがあることが少なくない。そうしたズレをズレとしてきちんと把握することが、「他者」や「異文化」としての地域を理解することに他ならない。

道具という意味では、情報やデータの分析のためのスキル、例えば、統計処理の知識や各種コンピュータのソフトウェアの使い方などの習得も重要である。かつての地域研究は、思想研究や歴史学などの人文科学的な色彩が強かったため、分析の方法・手法もそれに準じたものが用いられることが多かったが、現在ではビッグデータやAIを用いた新たな試みも増えてきている。地域研究の目的は地域の理解であり、そのための手段に制約をかけることに意味はない。

ディシプリン、現地の言語、分析のためのスキル——いずれも自宅でブラッシュアップできるものである。幸いなことに、近年ではインターネットを駆使すれば、ほとんどのことができる。現地の言語については、例えば、現地のドラマやニュースを通して触れることができるし、分析のためのスキルについては、ウェブ教材の類がゴロゴロ転がっている。

2. 遠くから眺める地域

とはいえ、これらのことはすべて「外堀」であって、「本丸」の現地に行かなければ地域研究にならないのではないかと、という声はあるだろう。しかし、地域は遠くから眺めることもできる。場合によっては、遠くから眺めておかなければ、いざ現地に行ったときに様々な事象に対して近視眼的になってしまい、ディテールにばかりこだわる「木を見て森を見ない」状態に陥る危険性がある。

例えば、その地域の歴史である。研究対象の地域の歴史的発展を知らずに、現地の様々な事象を正確に分析することは難しい。地域の歴史という文脈を意識しない没歴史的な見方はバイアスの罠に落ちる。その地域がどのように生成されたのか、それがそもそも1つの地域を構成していると言えるのか、言えるとすれば、その根拠は何なのか。こうした根源的な問題に向き合わなければ、現地に行っても情報やデータを収集するためのセンスや勘が働かず、先入観や思い込み、恣意的かつ予定調和的な「発見」に終始することになりかねない。

歴史の勉強のようなものは、現地に行けなくてもある程度はできる。ただし、その際は、日本語や英語で書かれたものだけでなく、現地語の思想書や歴史書を読むことで効率が上がる。現地語で書かれたもの自体が、その地域の論理を内包した貴重な情報でありデータとなり得るからである。また、余力があれば、隣接する地域のことも勉強しておくとうい。研究対象地域に固有であると思って（思い込んで）いたものが、案外そうでないことを発見できることがある。研究対象の地域を絶対視するのではなく、相対化していく作業である。

いざ現地のなかに入ってしまうと、日々の無数の発見や出来事に良くも悪くも埋没するようになり、地域の歴史のような俯瞰的なものの見方は難しくなる。遠くから眺めるからこ

そ見える地域の姿というものもある。

3. 今こそ、だからこそ、地域研究

以上、技術的なことを中心に現下のコロナ禍のなかでも地域研究が可能であることを論じてきた。そもそも「コロナとの戦い」は、戦争や紛争のような戦いと異なり、いつかは必ず勝利することが決まっている戦いである。つまり、乱暴に言ってしまうえば、我慢して待っているだけでよい戦いであり、敗北の不安を抱える必要もない。そのため、本稿ではこれまで「コロナ禍が収まれば再び地域に行ける」という前提で論を運んできた。

しかし、この新型コロナウイルスのパンデミックによって、もっと根本的なところから、言い換えれば、技術的ではなく理念的なところから、地域研究の可能性に疑問を感じるようになった学生・院生もいるだろう。こんなときに地域研究などやっていてよいのか、何の役にも立たないではないか、と。

感染症のパンデミックは、グローバル化の進んだ今日の世界の1つの特徴に他ならず、それゆえに、その世界共通の現象としての側面に関心が集まりがちである。人類的な課題となったパンデミックの普遍性と特定の地域にフォーカスする地域研究の特殊性は、一見すると相容れない。しかし、現下のコロナ禍は、世界全体を等しく覆い尽くした一方で、国や地域ごとに違った現象を生み出しているのも事実である。例えば、ヨーロッパとアジアでは、感染拡大／収束のトレンドやパターンに違いが見られる。また、とにかく人間を個体として捉える数字ばかりが先行するマスメディアの報道においてはなかなか見えてこないが、このコロナ禍への人びとの受け止め方についても地域間で違いがあるはずである。

つまり、新型コロナウイルスのパンデミックは、グローバル化した（とされる）世界が決してフラットなものではない現実を浮き彫りにしたのである。

だとすれば、世界の様々な地域の理解を目指す地域研究の出番である。パンデミックは文字通り世界規模の現象であるが、それは世界が1つになったことを意味しない。パンデミックの語が想起する認識に過度に引きずられことなく、むしろ、それによって、あらためて浮き彫りになったフラット「ではない」今の世界をありのままに捉えようとする営みは、「アフター・コロナの世界」の実像を正しく捉え、そのあり方を構想していく上で、ますます重要なものになるはずである。

「緊急 国際情勢解説—アフター・コロナの国際地域」のバックナンバーはこちら

・アフター・コロナの国際地域①—瀕死のWHOがアフター・コロナに突きつけるもの